

大学生とその父親・母親における性役割観の関連について

留岡 佑果・桂田恵美子

要約：子どもの性役割観に影響を及ぼす大きな要因として両親の存在が考えられる。そこで本研究では大学生とその両親（子-父親 57 組、子-母親 66 組）を対象として、性役割観における親子間の関連や子の性役割感と親の性役割行動（性別しつけ、父親の育児経験や家事遂行状況）との関連を性別ごとに検討した。性役割観の測定については、従来の性役割尺度に加え、個人の感情レベルでの性役割観を測定する尺度「反ステレオタイプへの寛容さ」尺度を独自に作成し、その妥当性についても検討した。その結果、性役割観における親子間の関連では、女子学生では父母の両者と関連が見られたが、男子学生では両者ともに関連が見られなかった。また、子の性役割観と親の性役割行動では、男子学生においてのみ、性役割観と父親の家事遂行に関連の傾向が示された。本研究の結果は先行研究の結果との比較において考察され、限界についても議論された。

キーワード：性役割観、性役割しつけ、父親の育児経験、父親の家事遂行状況、大学生

I. 問題と目的

近年の男女共同参画社会基本法や改正育児・介護休業法を始めとする様々な施策の展開により、現在の日本では女性の社会進出が大幅に進んできている。厚生労働省雇用均等・児童家庭局の「平成 21 年版 働く女性の実情」によると、平成 21 年度の女性労働力人口は前年に比べ 9 万人増加し、過去最多の 2,771 万人に達している。その一方で、男性は 41 万人減少しており、結果として、労働力人口総数に占める女性の割合は過去最高の 41.9% となっている。このような働く女性の増加により、夫婦ともに就労している共働き世帯も増え、人々の価値観や意識も大きく変わりつつある。このため、現在の日本では、これまでの社会通念であった伝統的性役割観、性役割分業意識が実際の社会活動と相応しなくなっている。父親の家事・育児分担状況と母親の就労の有無との関連を検討した研究（佐藤・佐藤・鈴木、2000）においても、就労女性が増加している現代社会において、性役割分業が適応的なシステムではなくなっていることが明らかにされている。こうした現代社会においては、人々の性役割観も変化してきていると考えられる。

性役割観とは、男女にふさわしいと期待される行動や役割についてどう考えるかという価値観または態度のことである（相良、1998）。子どもの性役割観形成には、家庭、学校教育、テレビ、友人関係などさまざまな要因が考えられるが、その中でも家庭内の、特に父母の影響

が大きいと考えられる。

相良（1998）は、小学生とその両親を対象に、子どもの性役割観に及ぼす父母の影響に関する研究を行っている。その結果、男子は、父親が伝統的な性役割観を持っていると、その子の性役割観も伝統的になることが示された。一方女子は、男子ほど影響は強くなかったが、同様の関係が母親との間でみられた。

同様の結果は、大学生を対象とした Katsurada, Morikawa & Kai (2003) の研究においても報告されている。この研究では、男子大学生の平等的性役割態度は父親の性役割態度と、女子大学生の平等的性役割態度は母親の性役割態度とそれぞれ関連が認められ、子どもの性役割態度には、異性の親ではなく同性の親から大きな影響を受けることが示された。

このような同性の親の性役割観や態度が子どもの性役割観と関連があるといった結果の背景には、同性の親が子どものロールモデルとなっていることが考えられる。しかし、より直接的な影響として、親の性別しつけも子どもの性役割観の形成に関連していると思われる。

佐藤・田中（2001）は、親の性役割観としつけについて、伝統的な性役割観を持つ親は男女別の伝統的しつけを重視し、それが子どものジェンダー形成に影響していることを示唆している。また、柏木（1975）は、親の性別しつけと青年の性役割観の形成で、両親は女子に対して多くの性別しつけを行い、女子は親から性別しつけを多く受けことで、そのしつけを肯定し受容する傾向があることを見出し、親の性別しつけが特に女子の性役

観に反映することを示唆している。女子青年の将来設計と父母の養育態度との関連をみた伊藤（1980）の研究においても、両親から性別役割行動を期待されて育った女性は、職経歴選択を女性役割期待に基づいたものをとり、性別役割行動を奨励されずに育った女性は、女性役割期待に捉われない選択をとるということが報告されている。このように、親の性役割観は子どもへの性別しつけに影響を与え、性別しつけは子ども自身の性役割観形成に影響を与える要因の一つであると考えられる。

日下部（2009）は、母親の要因だけでなく父親の要因についても検討している。母親の就労状況と父親の育児状況が大学生の育児観に与える影響について、就労している母親を持つ学生は出産後も母親が仕事を続けることに肯定的であり、育児に積極的に参加していた父親を持つ学生は育児が母親の仕事だとする意識が低く、育児に積極的でない父親を持つ学生は育児を母親の仕事だとする意識が強いという結果が得られている（日下部, 2009）。

このように、女性は母親を自身のロールモデルとして捉え将来のライフコース観に大きく影響を受けるという研究結果から、就労女性が増えつつある現代社会においては、その子ども達の伝統的な性役割観が今後、女性については薄れていくと言えるだろう。また、子どもの性役割観に影響を及ぼす親の態度は、母親だけでなく父親も重要だと考えられる。

以上より、子どもの性役割観に影響を及ぼす要因として、両親の存在が特に大きいと考えられる。これまで、母親の影響については、就労や育児状況など多くの研究がなされている。その一方で、子どもの自己の性役割認知については母親よりも父親の役割が重要であるという指摘（Lamb, 1981）があるにもかかわらず、父親の影響を検討した研究は乏しいと言える。そこで本研究では、特に父親の影響について検討するため、大学生からみた父親の現在の家事遂行状況、父親の過去の育児経験などを含め、性役割観との関連を検討する。

また、従来の性役割観の研究においては、社会一般の男性・女性の伝統的あるいは平等的性役割に対して同意する程度を聞く指標を使っているものがほとんどである。このような指標は個人の意識レベルでの性役割観を測定しているので建前としての性役割観かもしれない。そこで、本研究では「反ステレオタイプへの寛容さ」尺度を独自に作成し、個人の感情レベルでの性役割観を測定することを試みる。そしてこの尺度の妥当性を検討することも、本研究の目的の一つである。

先行研究をふまえ、本研究では以下の仮説をたてた。

1. 親が伝統的な性役割観を持つ者は、その子どもも伝統的な性役割観を持ち、親が平等的な性役割観を持つ者は、その子どもも平等的な性役割観を持つ。
2. 男性は父親の性役割観を、女性は母親の性役割観を

より強く受け継ぐ。

3. 家事・育児に積極的に参加している父親を持つ子どもは、そうでない者よりも平等的な性役割観を持つ。
4. 親から性別しつけを多く受けた者はより伝統的な性役割観を持つ。

II. 方 法

1. 調査対象者

大学生 112 名（男性 31 名、女性 81 名）、平均年齢 21.12 歳とその父親 57 名（平均年齢 53.49 歳）、母親 66 名（平均年齢 49.70 歳）が研究に参加した。質問紙は、父親用、母親用、学生用の 3 種類を 1 組として 150 組 450 部配布し、回収された質問紙は 235 部であった。回収されたのは学生用 112 部（回収率 74.6%）、父親用 57 部（回収率 38%）、母親用 63 部（回収率 42%）であった。3 者が揃ったデータは 57 組でその回収率は 38.0% であった。

2. 調査方法

質問紙は学生用、父親用、母親用の 3 種類を 1 組として、講義内または学内で配布した。父親用と母親用はそれぞれ封筒に入れ、3 種類をクリップで留めた状態で配布した。配布する際、質問紙は 3 種類あり、自分だけでなく父親と母親にも回答してもらうこと、1 週間後に回収しに来る口頭で伝えた。一人暮らしの学生の場合は、本人の許可を得て実家の住所を聞き、父用と母用 2 つの切手をはった返信用封筒を同封して質問紙を実家に郵送した。

3. 質問紙

質問紙は、学生用、父親用、母親用の 3 種類から構成されていた。

1) 性役割態度

平等主義的性役割態度スケール（SESRA）の短縮版（鈴木, 1994）を用いた。この尺度は、結婚・男女観、教育観、職業観、社会観の 4 つの領域から構成された 20 項目で成り立っている。これらの項目に、「ぜんぜんそういう思わない」（1 点）から「まったくそのとおりだと思う」（5 点）までの 5 件法で回答を求めた。得点が高いほど性役割に対して平等主義的であり、低いほど伝統主義的であると判定される。この尺度は、学生、父親、母親の 3 者すべてに回答を求めた。本研究における信頼性係数は、学生では $\alpha = .874$ 、父親では $\alpha = .828$ 、母親では $\alpha = .895$ であった。

2) 反ステレオタイプに対する寛容さ

本研究では、個人の感情レベルでの性役割観を測定する尺度を独自に作成した。この尺度は、反ステレオタイプ的な職業に就いている人に対する受容度を見るもので

ある。男性の反ステレオタイプ的職業に就いている人としては、保育士、看護師、専業主夫、家庭科の先生であり、女性の反ステレオタイプ的職業に就いている人としては、トラック運転手、大工、車掌、バスの運転手であった。

それぞれの反ステレオタイプ的職業に就いている人物について、まず実際に見た経験があるかを尋ね、経験の有無に関わらず、そのような人物を見た際どのように感じたか、または見たとしたらどう感じると思うかについて、「とても良いと思う」(1点)から「全く良いと思わない」(5点)の5件法で回答を求めた。得点が高いほど反ステレオタイプ的な職業に対して寛容ではない事を示す。この質問項目は、学生、父親、母親のすべてに回答を求めた。本研究での信頼性については、学生においては $\alpha=.946$ 、父親においては $\alpha=.854$ 、母親においては $\alpha=.846$ であった。加えて、人物を見た際、または見たと想定した際の感想について自由記述で答えてもらった。

3) 性役割的しつけ

大村（2010）によって大学生を対象に作成された「性役割的しつけ尺度」を使用した。この尺度は、男女で質問内容が異なり、「両親からよく言われた性役割的しつけ」について男性用、女性用各々5項目から構成されている。男性用の項目には「男なのだから泣くなと言われた」「強くなりなさいと言われた」などがあり、女性用の項目には「家事をするように言われた」「おしとやかにするように言われた」などがあった。回答は「全く当てはまらない」(1点)から「とてもよく当てはまる」(4点)の4件法であり、得点が高いほど、親による「性役割的しつけ」が多かったことを示す。この尺度は学生のみに用いた。本研究での信頼性については、男性用が $\alpha=.696$ 、女性用は $\alpha=.691$ であった。

4) 父親の現在の家事遂行状況

父親が普段の生活においてどの程度家事に参加しているかを尋ねるため、西宮市ホームページ内の父子手帳「第4章 育児マニュアル」に記載されている8つの家事項目を本質問紙の項目として用いた。例としては、「ゴミ集め・出し」「買い物・荷物持ち」「食事の片づけ」などである。この尺度については学生にのみ回答を求めた。大学生に、自分の父親の状況に当てはまるものを「全くしない」(1点)から「頻繁にする」(4点)までの4件法で回答してもらった。本研究での信頼性は $\alpha=.930$ であった。

5) 父親の過去の育児経験

子どもが小学校入学前、育児をどの程度行っていたかを尋ねるため、西宮市ホームページ内の父子手帳「第4章 育児マニュアル」に記載されている8つの育児項目を本質問紙の項目として使用し、父親に訪ねた。例とし

ては、「おむつ替えをする」「子どもを抱っこする」「食事の世話（ミルク）をする」などがあった。父親に、子どもが小学校入学前までの自身の育児経験に当てはまるものを「全くしない」(1点)から「頻繁にする」(4点)までの4件法で回答を求めた。本研究での信頼性は $\alpha=.840$ であった。

III. 結 果

最初に、本研究で独自に作成された「反ステレオタイプへの寛容さ」尺度の妥当性を検討した。その後、その尺度も含めて、親子間の性役割観どうしの関連や親の性役割しつけ、父親の家事・育児参加度と子の性役割観との関連を検討した。

1. 「反ステレオタイプへの寛容さ」尺度の妥当性の検討

まず、反ステレオタイプの職業に就いた人物を実際に見たことがある場合と無い場合で、尺度得点に差があるかについて検討した。大学生・父親・母親のすべてを加えた235名において、「反ステレオタイプへの寛容さ」尺度の8項目（男性・女性の反ステレオタイプの職業、各4項目）について、実際に見た経験の有無によるt検定を行った。その結果、男性の反ステレオタイプ職業では、「保育士」($t=4.72$, $df=233$, $p<.001$)、「看護師」($t=3.68$, $df=233$, $p<.001$),「専業主夫」($t=2.27$, $df=232$, $p<.05$)において、経験の有無による有意差が見られ、実際に見たことがある人の方が得点が低く、反ステレオタイプの職業人に対して寛容的であった。「家庭科の先生」においては見た経験の有無による有意差は認められなかった。女性の反ステレオタイプ職業についても、「トラックの運転手」($t=2.87$, $df=233$, $p<.01$),「大工」($t=2.75$, $df=233$, $p<.01$),「車掌」($t=3.52$, $df=233$, $p<.01$),「バス運転手」($t=2.82$, $df=233$, $p<.01$)のすべてで有意差が見られ、実際に見たことがある人の方が点数が低く、反ステレオタイプの職業人に対して寛容であった。それぞれの見た経験別の平均値と標準偏差値をTable 1に示した。

上記のt検定の結果、「男性の家庭科の先生」以外の7項目において経験の有る人と無い人で有意差が見られたので、この7項目については見た経験の有無別に「平等主義的性役割態度スケール（SESRA）」との相関分析を行った。その結果、「男性保育士」($r=-.23$, $p<.05$),「専業主夫」($r=-.33$, $p<.01$),「女性の大工」($r=-.29$, $p<.01$),「女性のバス運転手」($r=-.39$, $p<.01$)の4項目では見た経験の無い人においてSESRAと有意な負の相関が見られ、「女性のトラック運転手」($r=-.31$, $p<.01$)と「女性の車掌」($r=-.20$, $p<.01$)の2項目では見た経験の有る人において有意な負の相関が見られた。「男性看護師」については経験の有る人と無い

Table 1 「反ステレオタイプへの寛容さ」尺度の各項目の人数と平均値 (N=235)

	見た経験	n	平均値	標準偏差 (SD)
男性保育士	無	98	2.02	1.25
	有	137	1.43	.64
男性看護師	無	84	1.98	1.30
	有	151	1.50	.70
専業主夫	無	194	2.62	1.30
	有	40	2.13	1.04
男性の家庭科の先生	無	209	2.24	1.18
	有	25	1.96	1.34
女性トラック運転手	無	61	2.30	1.45
	有	174	1.74	.68
女性の大工	無	192	2.13	1.10
	有	43	1.63	.90
女性の車掌	無	46	1.98	.75
	有	189	1.51	.82
女性のバス運転手	無	116	1.86	.75
	有	119	1.55	.92

人のどちらにおいても有意な相関は見られなかった。

見た経験の有無による差異がなかった「男性の家庭科の先生」については、見たことの有る人と無い人を合わせて SESRA との相関を見た。その結果、有意な負の相関が見られた ($r = -.33$, $p < .01$)。

以上の結果から、「看護師」を除く上記 7 項目については、SESRA と有意な相関が出たことから、一応、妥当性があると考えられた。その為、7 項目の合計得点を個人の「反ステレオタイプへの寛容さ」得点として以後の分析に使用した。

2. 親子間の関連について

親子間の関連を見る際、女子学生と男子学生別々に分析を行なった。

①性役割観における親子間の関連

まず、女子大学生と父親の性役割観の関連を見るため、両者の「性役割態度」尺度と「反ステレオタイプへの寛容さ」尺度について相関分析を行なった。

その結果、Table 2 に示したように、女子学生の「反ステレオタイプへの寛容さ」と父親の「性役割態度」との間で有意な中程度の負の相関が見られた ($r = -.46$, $p < .01$)。これは、父親の性役割態度が平等的であるほど、娘は反ステレオタイプの職業人に対してポジティブであることを示している。また、有意傾向ではあるが、女子学生と父親の「性役割態度」の間 ($r = .29$, $p < .10$) と、女子学生と父親の「反ステレオタイプへの寛容さ」の間 ($r = .29$, $p < .10$) で弱い正の相関が見られた。

女子学生と母親についても同様に相関分析を行なった。その結果、Table 3 に示したように、女子学生と母親の「性役割態度」の間に有意な中程度の正の相関が見られた ($r = .43$, $p < .01$)。また、女子学生の「反ステレオタイプへの寛容さ」と母親の「性役割態度」の間では有意傾向ではあるが、負の弱い正の相関が見られた ($r = -.28$, p

Table 2 女子学生と父親の性役割観における相関係数 (n=43)

女子学生	父親	性役割態度	反ステレオタイプ
		.29 +	-.12
		-.46**	.29 +

** $p < .01$, + $p < .10$

Table 3 女子学生と母親の性役割観における相関係数 (n=50)

女子学生	母親	性役割態度	反ステレオタイプ
		.43**	-.23
		-.28 +	.15

** $p < .01$, + $p < .10$

Table 4 男子学生と親のその他の尺度間の相関係数 (n=31)

親	父親の育児経験	父親の家事遂行状況	性別しつけ
男子学生		-.06	.32 +
		.13	.16

* $p < .05$, + $p < .10$

注)「父親の育児経験」は父親自身が、「父親の家事遂行状況」と「性別しつけ」については子である大学生が回答したものである。

<.10)。これは、母親の性役割態度が平等的であるほど、娘は反ステレオタイプの職業人に対してポジティブである傾向を示している。

次に、男子学生について、性役割観における父親と母親との関連について同様の相関分析を行なった。しかし、男子学生と父母との間にはいずれにおいても有意な相関は見られなかった。

②子の性役割観と両親の性別しつけ、父親の家事・育児状況との関連

まず、女子大学生の性役割観と親の行動との関連を見るため、女子学生の「性役割態度」「反ステレオタイプへの寛容さ」の 2 尺度と、親の行動に関する「性別しつけ」「父親の家事遂行状況」「父親の育児経験」の 3 尺度について相関分析を行なった。その結果、女子学生においては親の行動との間にいずれも関連は見られなかった。

同様に、男子大学生の性役割観と親の行動についても相関分析を行なった。その結果、Table 4 に示したように男子学生の「性役割態度」と「父親の家事遂行状況」の間では有意傾向ではあるが正の弱い相関が見られた ($r = .32$, $p < .10$)。より平等的性役割態度をもつ男子学生は父親がより多く家事を行なっていると認知している傾向にあった。

IV. 考 察

本研究の目的は、独自に作成した「反ステレオタイプへの寛容さ」尺度の妥当性を検討すること、また大学生

の性役割観に及ぼす父親、母親の影響について検討することであった。以下、目的と仮説に沿って結果の考察を進める。

1. 「反ステレオタイプへの寛容さ」尺度の妥当性の検討

本研究で独自に作成された「反ステレオタイプへの寛容さ」尺度の妥当性を検討するため、まず、反ステレオタイプの職業に就いた人物を実際に見たことが有る場合と無い場合で、尺度得点に差があるかについて検討した。その結果、「家庭科の先生」を除く、「保育士」「看護師」「専業主夫」「トラックの運転手」「大工」「車掌」「バス運転手」の7項目において、実際に見たことがある人の方が反ステレオタイプの職業人に対して寛容であることが示された。この結果から、実際に目で見るという経験が反ステレオタイプ的な職業人を受容しやすくなると言える。このことは、今後、反ステレオタイプの職業人が増え、目の当たりにすることが頻繁になると、普通に受け入れられ、もはや反ステレオタイプという考えはなくなることを示唆していると思われる。

本研究で想定した8つの反ステレオタイプ職業人のうち、男性の看護師については実際に見たことがあるか否かにかかわらず、平等主義的性役割態度スケールとの関連がなかった。その為、この項目は妥当性がないと見なし、除いた。男性の看護師は実際に見たことがある人も多く、もはや反ステレオタイプとみなされていないかも知れない。他の反ステレオタイプの職業人については、見たことがある／無い、いずれかあるいは両方のサンプルで平等主義的性役割態度スケールと有意な関連が見られた為、ある程度の妥当性はあると考えられた。しかし、その相関係数は決して高いものではなく、今後、他の性役割観尺度との関連を確かめ、更なる妥当性の検討が必要である。

2. 親子間の関連について

本研究では、親子間の性役割観は関連し、特に同性の親の影響が強いという仮説を立てたが、女子学生においてのみ父親・母親との間に有意な相関が見られ、男子学生においては有意な関連は見られなかった。男子学生に関連が見られなかった原因としては、サンプル数の少なさが挙げられる。今回、父と息子の揃ったデータが15組、母と息子の揃ったデータが16組であり、極端に少なかった。今後は男子学生のサンプル数を増やして追試する必要がある。

親子間の関連が見られた女子学生サンプルでも、特に同性の親の影響が強いという仮説は支持されなかつた。女子学生と母親の平等主義的性役割態度得点が有意な正の相関を示したという結果は Katsurada, Morikawa & Kai (2003) の研究結果と一致するものであるが、本研究に

おいては、女子学生の「反ステレオタイプへの寛容さ」と父親の平等主義的性役割態度得点にも有意な関連が認められ、必ずしも同性の親の影響が強いとは言えない。これは、本研究において、「反ステレオタイプへの寛容さ」というより感情レベルで個人の性役割観を捉える尺度をも取り入れたために出てきた結果である。これらの結果は、意識レベルの性役割観では同性の親の影響が強いが、より感情レベルになると父親の影響の方が強いということを示唆している。これは、日頃話す機会の多い母娘とあまり会話はない父娘という一般的な関係を考えると納得がいく結果であると思われる。本研究の結果は、性役割観といつても、多様な種類の性役割観を測定することにより詳細な親子間の関連が明らかにされることを示しており、今後も、様々な性役割観尺度を用いて親子の関連性を見て行くことが重要と思われる。

次に、親の行動面も子である大学生の性役割観に影響を及ぼしていると考え、性別しつけや特に父親の育児・家事参加と子の性役割観の関連を検討したが、男子学生の平等的性役割観と父親の家事参加において関連が見られただけであった。しかし、父親の家事参加に関しては子どもの認知であり、関連性が出ているだけなので、実際、父親の家事参加が子の性役割観に影響しているとは言い難い。今後は、父親自身の報告による家事参加との関連をみてみる必要があるだろう。また、因果関係をより明確にするためには、現在よりも過去における家事参加との関連を見る方が良いと思われる。

柏木 (1975) の研究では、女性は性別しつけを多く受けるほど伝統的性役割観が強くなることが示唆されていたが、本研究では同様の結果は得られなかった。柏木の研究は30年以上前の古いものであり、現在の女子学生も性別しつけは受けているが、昔に比べるとそれ程厳しいものではないことが考えられる。また、そうした性別しつけを受け取る側の女子学生の性役割観も昔と比べて変わっているので、性別しつけそのものの効果がなくなっていると思われる。

本研究では、性役割観の親子間の関連で、行動レベルよりも意識レベルや感情レベルでの性役割観により関連性が見られたのは興味深い。これは、大学生とその親というサンプルの特徴によるものが大きいと考えられる。今後は、別の発達段階にある親子間（例えば、幼児とその親）の性役割観の関連について調査し、本研究の結果と比較するのも興味深いと思われる。

参考・引用文献

- 伊藤裕子 (1980). 女子青年の性役割観と父母の養育態度－大学生の職経歴選択を中心に－. 教育心理学研究, 28, 67-71.

- 柏木恵子（1975）。親の性別しつけと青年の性役割観の形成。日本教育心理学会総会発表論文集, 17, 348-349.
- Katsurada, E., Morikawa, T., & Kai, M. (2003). Like father, like son: Parent-child relationships in terms of gender-related personalities, attitudes and behaviors among Japanese young adults, *Waseda Journal of Asian Studies*, 24, 25-33.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局（2010）。「平成21年版働く女性の実情」。2011年6月30日に以下のサイトより閲覧 <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2/r98520000004/r4e.html>
- 日下部典子（2009）。母親の就労状況と親の育児行動が大学生の育児観に及ぼす影響。福山大学人間文化学部紀要, 9, 99-107.
- Lamb, M. E. (1981). Fathers and child development: An integrative overview. In M. E. Lamb (Ed.), *The role of the father in child development*. New York: Wiley.
- 大村健太（2010）。異性きょうだいの有無とジェンダー・アイデンティティとの関連について。関西学院大学文学部総合心理科学科2010年度卒業論文。
- 相良順子（1998）。子どもの性役割観に及ぼす父母の影響。お茶の水女子大学人間文化研究年報, 21, 246-253.
- 佐藤秀紀・佐藤秀一・鈴木幸雄（2000）。育児期の子どもをかかえた家庭における父親の家事・育児分担と母親の就労との関係。厚生の指標, 47, 12-19.
- 佐藤和順・田中亨胤（2001）。親の性役割観をモデル環境とした子どものしつけ文化。日本教育社会学会大会発表要旨集録, 53, 18-19.
- 鈴木淳子（1994）。平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成。心理学研究, 65, 34-41.